



「かに
蟹と籠」

土の生命を咲かせて。

松橋町陶芸家

自然への愛情をこめて
(作品に添えたメッセージより)

原さんは、今年の四月三日から五日まで、米国シアトルで開催された「第十一回サクラ祭り」と日本文化祭」にメインゲストとして招かれました。この祭りは、日系人ら市民の実行委員が開催する米国国内でも有名なサクラ祭りの一つで、毎年日本の伝統文化からテーマを選び、その代表的な作家と作品を紹介しています。今年のテーマは「陶」。原さんは、「地球賛歌」という百一匹のカニを配した作品を出展。百一という数は、「これから」を意味しているそうです。

竹籠を這い、大きなハサミをグツと持ち上げた川ガニ。指を刺さんばかりのイガをパツクリはじかせた栗。どちらも近所の林や川にころがっていたモチーフだと作者はこともなげに言われますが、本物にも増す強烈な存在感で己れの生命を主張しています。作者原構成、五十四歳。原さんは、「原点は土にある。土の持つ個性、持ち味を一〇〇%引き出そうとすれば、形や焼き方は必ずから決まってくるものだ」と言います。陶——それは炎の洗礼を受けた土の華
炎と土と人が陶を作る

原構成

いたのは、昭和四十七年のこと。松橋は奥さんの

里でした。初めてこの地を訪れ、町の地形・景色を見たとき、何かある。とピンと来たそうです。生まれ育った有田と共通する独特の感じ。辺りを歩き回ってみると果して焼いてみたい土がひっそりと眠っていました。それもそのはず、江戸時代初期から明治にかけて、松橋では、「瓶屋」や「鉢屋」という字名の地で、茶人や愛陶家に好まれた松橋焼が作られていたのです。文獻を調べた原さんが、有田にはもういい土はない。ならばいい土を良いい土に恵まれた松橋に窯を築いた方が、腰の入った作品づくりが出来る。

「私の作品が現地の人達にどう理解されるか不安もありましたが、美に対する共感の世界中同じなんだとつくづく感じました。いいものをいいと感じる心は変わりはないですね。」
反響は大きかったそうです。現地の新聞は、「百一匹カニさん大行進」と、いかにもアメリカらしく紹介し、子供達は、作品を見て、「可愛い、ノコを連発。それが一番嬉しかったと原さん。」「ただ本物と全く同じような色・形を作っても、それはおもちやでしかない。本物以上に本物らしい生きた作品を創らねば——。」
そんな熱い思いが、言葉や文化の壁を乗り越え、人々の心を魅了したのでしょう。
原さんが松橋に窯を築



陶 歴

古陶磁の鑑識家祖父岸雪と陶芸家父鉄牛に師事する
昭和24年 九州・山口陶芸展にて佐賀県知事賞受賞
昭和32年 ブラジル国へ渡航 作陶生活のかたわら陶芸指導を行う

昭和38年 帰国、有田陶窯を設立
昭和47年 現在地に構成窯を築窯
昭和59年 日中韓文化交流展 招待出品
●日展、日本新工芸展ほか、入選・受賞多数

化は絶えず構築されてこそ文化であると思えます。昭和に生まれた人間として、昭和にしかない作品を一品でもいいから残したいですね。」
原さんの夢は、豊かな土に恵まれた松橋の風土を背景に、先達の遺業を少しでも継承し、さらに後世へと残るような新たな松橋焼のスタイルを築き上げることです。
今日も土に向かい、土の生命と対話をする原さん。原さんの夢は、きっと松橋のふるさと起こしにも、一役買うことでしょう。

と思いついた時から構成窯の歴史は始まったのです。

原さんの仕事場を訪れた人が、まず目を見張るのは、並べられた作品のバラエティの豊かさ。カニや栗の陶彫の外に白磁や辰砂の壺、抹茶茶碗、女性をイメージしたオブジュとて一人の手になるものとは思えません。「有田焼の伝統的技法が根底にあるのは確かです。でも私は、それに自分の個性をプラスしたいと考えています。芸術でも文化でも、ただ伝統を守っていくだけではいけない。文